

ごあいさつ

ご存知のように、日本は世界屈指の長寿国ですが、その半面、少子化にはなかなか歯止めがかからないうえ、総人口は平成 67 (2055) 年から平成 72 (2060) 年にかけて約 4,000 万人も減少し、本格的な少子高齢社会、さらには人口減少社会を迎えるのではないかと推計されています。このため、高齢者は今後、どのような老後を送るべきか、また、次世代の人たちにどのようなメッセージを託し、この国や地域のありようを展望すべきか、論議されつつあります。

しかし、このようななか、80 歳代の高齢者におけるこれらの意向調査および研究となると、国内はもとより、海外でも皆無の状態です。これには 80 歳代ともなると多くの人々は医療・介護のサービスの受け手となるなど、さまざまな困難が伴うというイメージが強いため、調査研究の対象にされていないからですが、80 歳代になってもさまざまな社会活動に参加し、生きがいのある老後を送っている人たちも少なくありません。

そこで、非営利任意団体・福祉デザイン研究所では平成 25 (2013) 年度、このような 80 歳代の高齢者を対象とした「80 歳代高齢者の生きがいの持続的促進とその社会的対応」をテーマにした研究プロジェクトを立ち上げ、公益財団法人みずほ教育福祉財団に対し、調査研究助成に応募させていただいた結果、同年度より向こう 3 年間にわたる調査研究の助成が認められました。

具体的には、高齢者の老後の生きがいや社会参加のあり方に関する研究に努めている女性 3 人を客員研究員としてお迎えし、80 歳代の高齢者が後期高齢期を迎え、どのようなハンディキャップを負っているのか、否、そのようなハンディキャップもなく、生きがいの持続的促進を図り、かつどのような社会的対応をしているのか、多くの関係団体のなかでも長年、名実ともアクティブな社会的対応に努めている特定非営利活動法人 (NPO 法人) ニッポン・アクティブライフ・クラブ (NALC; ナルク、大阪市) の 80 歳代の会員を対象にアンケートおよびグループインタビュー調査を行いました。さらに、各地で社会活動に取り組んでいる会員以外の 80 歳代の高齢者を対象に別途、個別インタビュー調査をさせていただき、今後、高齢者は 80 歳代となってもどのような老後を送るべきか、また、私たち次世代はこの国や地域のありようを展望すべきか、その提言をまとめるため、調査研究に努めました。

本調査報告書はその結果を集大成したのですが、今回の調査研究を通じ、改めて人生の大先輩として多くの示唆を受けました。

最後に、お忙しいなか、本調査研究にご協力をいただいたナルクなど関係各位、および生前、本調査研究に対し、熱心にご指導していただいた故三浦文夫・日本社会事業大学名誉教授、さらには研究助成をして下さった公益財団法人みずほ教育福祉財団に対し、厚く御礼を申し上げます。

福祉デザイン研究所所長
(武蔵野大学大学院教授)

川村 匡由

***研究メンバー（監修・主な執筆ページ；順不同）**

1. 川村 匡由 福祉デザイン研究所長・武蔵野大学大学院教授（監修・P1～3、58～59、65～69、70）
2. 島津 淳 同所員・桜美林大学教授（P52～53、70）
3. 豊田 保 同所員・新潟医療福祉大学教授（P51～52、70）
4. 荒井 浩道 同所員・駒澤大学教授（P2～4、48～50、63、70）
5. 小野 篤司 同所員・宇都宮短期大学専任講師（P61～62、71）
6. 石川 陽一 同所員・NPO 法人全国移動サービスネットワーク事務局員（P4、43～47、54～55、71）
7. 野上 隆憲 同所員・有限会社地域政策ネットワーク研究所代表取締役（P4、9～41、71）
8. 石井 三智子 客員研究員・明治学院大学非常勤講師（P59～60、71）
9. 藤森 洵子 同・シニア社会学会会員（P55～56、71）
10. 池田 恵子 同・相模原市一時生活支援事業自立支援相談員（P57～58、72）